

(清水町) 清水ミライ自分ごと化会議 (少子高齢化①) 議事メモ

日時	令和2年6月27日(土) 9時25分から12時00分まで
場所	各自オンライン参加
その他	コーディネーター 伊藤伸 (構想日本) ナビゲーター 香田裕一 (十勝の未来を考える自治体職員の会: 幕別町職) オブザーバー 阿部俊夫 (保健福祉課福祉係長) 寺本圭佑 (保健福祉課在宅支援係長) 参加者数 6名 傍聴者数 (町民) 0名、(町外) 0名、(報道) 0名 事務局 前田 真 (企画課長)、川口二郎 (企画課長補佐)、 田村幸紀 (企画課政策企画係長)、木村翔 (企画課政策企画係主事)、桂井那津未 (企画課政策企画係主事)、川岸祐仁 (構想日本)

趣旨・概要

第5回目のテーマは「少子高齢化・情報発信」

- (1) 最初の3回は、アンケート結果で「まちの強み」をテーマに、1テーマを1回の開催で完結させてきたが、第4回からはアンケートで意見が多く出た「少子高齢化」と「情報発信」といった、「まちの課題」について議論を進めるため、3回継続して同一テーマで議論する。
- (2) 少子化対策では、子育て環境の充実策として、出産環境や子育て環境、子どもの遊び場の充実が挙げられる。また、高齢化への対策として、それらに対する行政の役割交通弱者への対策は十分か。路線バス等がない中、町民の足を確保する交通網を形成するために必要なことは何か。

前回の班をさらに2つに分け、オンラインで会議を実施した。これまでの会議の振り返りを行ったのち、ナビゲーター及びオブザーバーを交えて前回と同じテーマでグループ討議をおこなった。

これまでの振り返り

清水町の第6期総合計画(10年計画)を作成するにあたり、いろいろな住民から意見を聞くために無作為抽出という手法を使ってこの自分ごと化会議を行ってきた。この計画を作るプ

ロセスの中にいろいろな人に関わってもらい、「自分ごと化」として捉えてもらうことを目的としている。去年の7月からスタートし今日が5回目となる。最初の3回は清水町の強みを中心に議論をしてきた。4回目以降については課題として取り上げられた部分について単発ではなく3回通して議論していくこととした。今日は「少子高齢化」の班になる。前回は子育て環境を中心に議論をしてきた。改善提案シートを取りまとめた結果、現状の課題として「子供を生み・育てる環境」「若者の働く場」「子どもの遊び場」「充実した医療福祉制度のPR不足」に分類された。子育て環境の制度はしっかりしているが、子どもの遊び場が不足しているという意見が多かった。子どもが外で遊びたいと思える環境整備が大事ではないかという話があった。コロナによってかなりの外出規制があったと思う。子どもの遊び場とコロナはかなり影響があると感じている。これまでが前回までの振り返りとなる。今回は高齢化対策について中心に議論をしていく。次回は少子高齢化について集約に向けた議論をする予定となっている。

#### テーマについて議論（高齢化対策）

事務局、オブザーバーより資料説明。

コ：清水町の現状を説明していただいた。清水町の高齢化率は36.7%であり、全国平均28.4%と比べるとすごく高いが、地方は高齢化率が高い現状にある。一人暮らしの高齢者の人口割合は清水町が28.5%であり、全国平均28.3%と比べても変わらない。このことから清水町の高齢化率は高いが、一人暮らしの高齢者が少ないことがわかる。地域福祉計画の中で今後の課題として地域での支え合うために分野や世代を超えて利用者に立ったサービスを考える必要があるという話があった。もう一つの課題として介護人材の不足がある。これはアンケートによると重労働や低賃金という原因が挙げられる。清水町の要介護認定率は20%程度で、全国平均とあまり変わらない。清水町の高齢者の暮らしについて感じることを、またコロナで影響が出ていることについて話をしていただきたい。

メ①：コロナではみんな外出自粛を守り、自分の身は自分で守っていた。家族で住んでいると、自分が感染すると他の人にうつしてしまうのではないかという不安があった。高齢者が町で歩いている姿を見るが荷物が多く大変だと感じる。用事を1回で済まそうとする人が多く余計大変だと感じる。

メ②：高齢者は元気な人が多く、外出する人も多い。元気でいたいと自覚している人も多い。介護が必要な人や社会的に不安のある高齢者に対して、支えていきたいという気持ちがある。コロナで不安な中、地域活動をやってきたが、いまだかつてない感染症のためみんなで自粛しようとして一丸となって取り組んできた。

メ③：幼少期からの性格の積み重ねもあるため、高齢者になって何かをするという必要性を感じ

じていきなりすることは難しい。コロナから自分の身を守るために新聞やテレビで情報を得ているが、予防については個人差がある。

メ④：町内でコミュニティバスが走っているが、時間の制限があるため急な買い物に対しては、足の確保が難しい。お店側が荷物を配送するなどの対応をしている。商店街に関しては後継者不足の問題もある。コロナの影響で買い物をする人は減ったが、マスクに対しての問い合わせが多かった。

メ⑤：コロナは高齢者の重症化のリスクが高い。外出している高齢者が少なくなったが、外出をしなくなったことによって生活習慣病のリスクが増えるのではないかと感じる。清水町だけでは日用品等の買い物で足りないものがあるため、帯広へ行かなければならない場面があると思うが、公共交通機関の利用者がすごく減ったと感じる。これまで清水町に住んでいて高齢者は元気な人が多いと感じる。

メ⑥：現在室蘭に住んでいるが、室蘭に来て感じたことは周りとの関わりが少ないこと。清水町ではあいさつなどのコミュニケーションが日常的にあったので改めて良いと感じた。コロナについてテレビで過剰な報道があり、外出をしづらい環境があり心苦しかった。

コ：高齢化率は高いが、元気な高齢者が多いと感じた。しかし、現状のままでいいのか。どれだけ年をとっても元気に暮らしていけるかはわからないという意見が多かったと感じる。

ナ：幕別町も高齢化率が30%を超えている。この高齢者たちが働ける環境づくりを進めているが、雇用側と労働者とのギャップがあり難しい。コミュニティバスでは個人の目的だけにあった運行が難しい。コロナでもサークル活動をやめない高齢者もいた。

コ：「高齢者の足は誰が守る？」「若い人と高齢者のコミュニケーションは清水町ではできている方？」「高齢者が更に暮らしやすくなるために行政がしなければならないこと。地域や民間でできることはないか」の3つテーマに絞って議論をしていきたいと思う。委員よりチャット機能で質問のあった免許の返納をしている人数について清水町の現状はわかるか。

事：昨年は1年間で50名程度。これからはどんどん増えていくと予想している。

コ：清水町での免許返納はリスクがあると思うが、公共交通機関の充実が免許返納につながっていると思うか。

事：免許返納する人は近くに家族がいるか、公共交通機関があるかなど計画的に返納している

と思う。また、まだ運転できるのに家族から免許返納への指摘があり免許返納うつケースもある。

メ④：免許返納する人が多く、驚いた。親に対して免許返納を勧めるケースの話はよく聞く話だと思う。

コ：足の確保についてどう守っていくか。

メ③：近隣の高齢者がどんな生活をしているのか、高齢者への気配りが必要。また高齢者側も周りに頼るといった考え方が必要ではないかと思う。

コ：現在の清水町はそういう雰囲気はあるか。

メ③：高齢者になってから一人で物事を始めるのは大変なため、周りからの手助けがあっても良いのではないかと思う。地域コミュニティへの参加のきっかけとなるような人がいれば良いと思う。昔と比べてそういう部分が少なくなっていると感じる。

コ：高齢者の車の運転が難しくなっていく中、どうやって外へ出ていくのか。

メ②：家族関係がすごく大事になってくると思う。車の維持費を考えると、タクシーの利用もできるのではないかと。すべてを行政に頼るだけでなく、自分自身でどうにかするという意識を持たなければならない。

コ：家から目的地までの交通確保については一般的に行政が税金を使ってやることの方が多い。しかし愛知県のある市では行政では一切お金を出さず、民間企業が連携をしてやっている事例がある。これは人を目的地に運ぶことによってお金を使う機会が多くなるメリットがある。清水町の移送サービスの利用者は多くないと感じるが、清水町では現状をどう捉えているか。また、今度増えていくことを考えると、費用も増えていくと思うが、地域や民間と連携をする考えはあるか。

事：地域公共交通にかかる費用について、平成23年度は210万円ほどかけていたが、路線拡大等により令和2年度は1,200万円に拡充して交通弱者に対して支援をしている。経費の割にお客様満足度が低いと感じている。理想は自分の必要なときに自分のために動いてくれる車があればいいが、全ての人の需要を満たすには財政がパンクしてしまうため、現在の費用を有効に活用していくのが、これからの公共交通の課題と感じている。

オ②：福祉課で行っている移送サービスについて、町内のタクシー会社に車いす対応の車がないため、車いすの利用者に限定して行っているサービスがある。また高齢者タクシー乗車券については、助成金額が年額12,000円のため月1回タクシーを利用される人については、助成金額を上回ってしまうため、全ての高齢者に対して満足していただけるものではないと感じているため、今後の在り方について考える必要がある。

コ：企画課からお客様満足度が低いと感じるという話があったが、福祉課としてもそう感じるか。

オ②：時間的制約があるため。時間を合わせなければならないなどといった手軽感がないという話を聞くため、満足感につながっているかは難しい部分があると思う。

メ①：自分が車を運転できない立場にならないとわからないが、この会議を通して公共交通について気にするようになった。実際に利用する人が増え、浸透していけば満足度が上がっていくのではないかと。コミュニティバスやタクシーなどいろいろな選択肢が増えると良いのではないかと思う。

コ：行政がやっていることは選択肢の一つと捉えることが大切と感じた。商品の配達サービスはお店が行っていることであり、行政の支援がすべてではない。行政と民間が連携をすることによって、満足度は高まるかもしれないと感じた。

メ④：商店街組合で商品の注文を受けて、個店に伝えて配達するような仕組みがあれば良いのではないかと思う。

コ：民間企業と連携をして、配達サービスを実施している自治体もある。清水町でもそういう考え方があってもいいのではないかと思う。

事：行政は町民に不公平がないように経費をかけている。もしかしたら近隣の人が交通の手助けをするための支援をした方がより満足度は高まるかもしれないが、事故等のトラブルが起きるリスクもあるため、行政がトラブルの起きないような仕組みづくりができれば、より細やかなサービスを提供できるかもしれないと考えている。しかし町内会によって支援に差が出てしまうことが考えられるため、公平性に対する批判をどう乗り越えられるかという課題がある。

コ：鹿児島県の屋久島では地域活動に対して交付金を出している。その中で近所の人たちが運転するための保険を負担している事例もある。

若い人と高齢者のコミュニケーションについてどう思っているか。

メ⑥：町内会を通じて、中学生までは高齢者とのコミュニケーションをとっていた。

メ③：町内会の行事が減っている。その原因は役員の負担が大きく、担い手がないため。今は人とのコミュニケーションを取ることがあまり求められてないように感じる。自分もこれから年を取って、人の手助けが必要となる場面があると思う。そのときのために周りの人たちとつながっていることが大切だと思う。細やかな生活の手助けをするのは、行政ではなく、近所付き合いだと思うが、高齢者も含めて人とのつながりが薄くなっていると感じる。すぐに解決できる問題ではないため、環境づくりが大切だと思う。

コ：幕別町では札幌のように若い人が増えている地域があると思うが、高齢者とのコミュニケーションの現状はどうか。

ナ：高齢者はコミュニケーションを取りたいと思っているが、札幌市街は若い人が多く、近所付き合いもないため、接する機会が少ない。幕別市街は帯広からの距離があるため、居酒屋等でのコミュニケーションがあり、地域性があるのではないかと思う。町内会に加入している人も少ない。

コ：解決するために行っていることはありますか。

ナ：個人的には週1回地元へ飲みに行くようにしている。高齢者の方の話はためになることが多い。若い人をそういう場へ連れていくことも心がけている。

コ：清水町では居酒屋コミュニティはあるか。

事：町内会単位で飲みに行く雰囲気は少ないと思うが、町内会行事が年に2～3回はあるので、そこでコミュニケーションをとる機会はある。

コ：高校生、社会人になっても高齢者との接点を作るためにどうしたらよいか。

メ⑥：町内会に入らない人が多い。SNSが普及したため、身近な人とのコミュニケーションに重要性を感じなくなったことが原因ではないかと思う。

メ③：町内会が一番コミュニケーションを取りやすい場だと思う。多世代で住んでいる家族が減った。普段から祖父母と住んでおり、高齢者との接点に抵抗がない。多世代で住むことによって町内会に入るきっかけにもなると思う。SNSの普及により、周りとのコミュニケーション

を取らなくても良いという風潮がある。

メ②：地域でのコミュニケーションが少なくなったと感じる。以前は学校行事を通して地域とのつながりがあったが、学校が閉校してからは地域で集まる機会がなくなってしまった。家族間のコミュニケーションは大事にしている。閉校した学校が介護施設になったため、高齢者同士で交流を図る場になっている。

コ：若い世代と高齢者のコミュニケーションに対して、行政が考えていることはあるか。

事：積極的に進めている町ではない。効率性を追求するために人々をカテゴライズして、政策をしてきた。この考え方を見直す時期に来ているかもしれない。昔は制約をあまりつけずに町内会へ助成金を出していたが、今は制約があり、行政がやってほしいものだけに助成金を出している形となっている。この制約をなくして町内会へ助成金を出すことで、近所付き合いや地域の公共交通の仕組みに役立つかもしれない。

コ：助成金の目的が地域コミュニティを維持することや、元気な高齢社会でありつづけることを実現するための手段として考えることが重要。

これまで公共交通と高齢者のコミュニケーションの2つの論点について話をしてきたが、高齢者がさらに暮らしやすくするために行政がしなければならないことはあるか。

メ①：若者と高齢者をつなぐ人や場所が必要と感じる。きっかけを作れる人が増えていけばいいと思う。

メ②：高齢になっても何かやりたい気持ちがある。自分から声をかけ、仲間を作ることで少しずつコミュニティを広げていけばいいのではないかと思う。

メ③：人に興味をもつ力を育てることで、困っている人に気づき、助けることができるのではないかと思う。また困っている人が自ら発信することも大切。困っている人を助ける環境、困っている人が発信できる環境づくりが行政の役割になってくるのではないかと思う。

メ④：他人を他人と思わない意識づくりが大事ではないか。役場の若手職員が清水町のことをよくわかってないと感じる。

メ⑥：いろいろなコミュニティが活性化することで助け合いにつながる。地域コミュニティに力を入れてみてもいいのではないかと思う。

ナ：行政のできることは限られている。行政が介入することでうまくいかなくなる部分もある。忠類村は地域コミュニティが活発で町内会対抗の運動会がある。これをきっかけにして新しい人とつながりができることがある。

オ①：地域福祉計画を取り組むための参考となる意見がたくさんあった。行政ができることは意外と少ない。やらなければいけないという義務感にとらわれ、一方的な考え方になることが多いと感じる。支える側と支えられる側の気持ちの両方を大切にできる町になっていけば良いと思う。

オ②：行政の仕事はサービスの提供が目的となってしまうことが多いが、もっと人に焦点を当てて考えることが重要だと感じた。

コ：島根県の雲南市では地域の中でおせっかいをする人を増やすために「おせっかい会議」をやっている。今日の話とつながるところが多いと感じる。

事：次回も同じテーマで取りまとめを行うので、次の機会までにいろいろな話を考えていただければと思う。



(清水町) 清水ミライ自分ごと化会議 (少子高齢化②) 議事メモ

日時	令和2年6月27日(土) 13時00分から16時00分まで
場所	各自オンライン参加
その他	コーディネーター 伊藤伸 (構想日本) ナビゲーター 香田裕一 (十勝の未来を考える自治体職員の会: 幕別町職) オブザーバー 阿部俊夫 (保健福祉課福祉係長) 寺本圭佑 (保健福祉課在宅支援係長) 参加者数 3名 傍聴者数 (町民) 0名、(町外) 0名、(報道) 1名 事務局 前田 真 (企画課長)、川口二郎 (企画課長補佐)、 田村幸紀 (企画課政策企画係長)、木村翔 (企画課政策企画係主事)、桂井那津未 (企画課政策企画係主事)、川岸祐仁 (構想日本)

趣旨・概要

第5回目のテーマは「少子高齢化・情報発信」

- (1) 最初の3回は、アンケート結果で「まちの強み」をテーマに、1テーマを1回の開催で完結させてきたが、第4回からはアンケートで意見が多く出た「少子高齢化」と「情報発信」といった、「まちの課題」について議論を進めるため、3回継続して同一テーマで議論する。
- (2) 少子化対策では、子育て環境の充実策として、出産環境や子育て環境、子どもの遊び場の充実が挙げられる。また、高齢化への対策として、それらに対する行政の役割交通弱者への対策は十分か。路線バス等がない中、町民の足を確保する交通網を形成するために必要なことは何か。

前回の班をさらに2つに分け、オンラインで会議を実施した。これまでの会議の振り返りを行ったのち、ナビゲーター及びオブザーバーを交えて前回と同じテーマでグループ討議をおこなった。

これまでの振り返り

清水町の第6期総合計画(10年計画)を作成するにあたり、いろいろな住民から意見を聞くために無作為抽出という手法を使ってこの自分ごと化会議を行ってきた。この計画を作るプ

ロセスの中にいろいろな人に関わってもらい、「自分ごと化」として捉えてもらうことを目的としている。去年の7月からスタートし今日が5回目となる。最初の3回は清水町の強みを中心に議論をしてきた。4回目以降については課題として取り上げられた部分について単発ではなく3回通して議論していくこととした。今日は「少子高齢化」の班になる。前回は子育て環境を中心に議論をしてきた。改善提案シートを取りまとめた結果、現状の課題として「子供を生み・育てる環境」「若者の働く場」「子どもの遊び場」「充実した医療福祉制度のPR不足」に分類された。子育て環境の制度はしっかりしているが、子どもの遊び場が不足しているという意見が多かった。子どもが外で遊びたいと思える環境整備が大事ではないかという話があった。コロナによってかなりの外出規制があったと思う。子どもの遊び場とコロナはかなり影響があると感じている。これまでが前回までの振り返りとなる。今回は高齢化対策について中心に議論をしていく。次回は少子高齢化について集約に向けた議論をする予定となっている。

#### テーマについて議論（高齢化対策）

事務局、オブザーバーより資料説明。

コ：清水町の現状を説明していただいた。清水町の高齢化率は36.7%であり、全国平均28.4%と比べるとすごく高いが、地方は高齢化率が高い現状にある。一人暮らしの高齢者の人口割合は清水町が28.5%であり、全国平均28.3%と比べても変わらない。このことから清水町の高齢化率は高いが、一人暮らしの高齢者が少ないことがわかる。地域福祉計画の中で今後の課題として地域での支え合うために分野や世代を超えて利用者に立ったサービスを考える必要があるという話があった。もう一つの課題として介護人材の不足がある。これはアンケートによると重労働や低賃金という原因が挙げられる。清水町の要介護認定率は20%程度で、全国平均とあまり変わらない。清水町の高齢者の暮らしについて感じることを、またコロナで影響が出ていることについて話をしていただきたい。

メ①：自分でできることに自信がなくなってきた。高齢者の気持ちが折れないように支援をしていただきたい。コロナの影響で地域住民の移動が制限されたため、町内会で一人暮らしをしている高齢者の見守りをして手助けていこうという話があるが、やってもよいかわからない。仕事も制限される中でこれから生活していけるか不安。

メ②：高齢者の中には自分の体力を維持しようと、散歩している人がいる。自分の体をいかに保つか気をつけている人も多いため、そこへの支援が必要。町内会に入って感じたことは、会合など集まる機会が多いが、独居世帯に対する思いがない。それが地域の支えになっていないと感じる。町内会行事に一部の人間しか参加していない。独居世帯に対しての見守りが少ないと感じる。行政は受身が多く、積極的に働きかけることがない。民生委員も各家庭を見守っていないと感じている。住民の声に対する積極的な行動力が少ない。物事に対して継続性がない。

地域の結びつきがないところが課題ではないか。コロナでも外出している人をたくさん見かけるため、他の人への思いやりがないのかもしれない。

メ③：農村地区では独居世帯少ない。近くに子どもが後継者として住んでいて、親の面倒を見ているのが特徴。元気な高齢者も多い。家庭菜園をしている人や外で活動している人が多いため、体力の維持につながっている。コロナ感染のリスクを考え病院に行かないよう心がけていた。一度病院を受診したが、かなり空いていた。これが必要最小限求められている医療の実態かもしれない。

ナ：幕別町も高齢化率が高いが、昔に比べて元気な人が多くなったと感じる。元気な高齢者を有効活用するために「幕別働きたい支援事業」という取り組みをおり、幕別町が無料の職業紹介をしている。主に農業と介護事業所へ紹介をしている。農業者が求めている労働力と高齢者がやりたい仕事にズレが生じているため、これから見直していかなければならない。コロナでも高齢者は活発に活動していたイメージがある。

コ：清水町のシニア登録制度について詳しく教えてほしい。

事：主に小学校や中学校への外部講師を行っている。

コ：高齢者が元気を維持するやり方として、実際にシニア登録制度を利用して伝えたいことがあるか。また周りの人に薦めたいと思うか。逆に利用しづらいと感じることはあるか。

メ①：体を動かすことへのサポートをしてほしい。サークル活動などがあれば良いと感じるが、コロナの影響で活動が難しいというジレンマがある。

コ：「地域で高齢者を支えるにはどうしたらいいか」「高齢者が元気な体を維持するために今まで以上にできることはあるか」のこの2つについて議論していきたい。

メ③：町内にシルバー人材センターがある。労働力が不足してきた時に元気な高齢者が働ける場を増やしていきたい。そのために周りの理解と高齢者に合った働く環境づくりが必要。

オ①：シルバー人材センターには施設の夜間警備や草刈をお願いすることが多い。現在は登録者が少ないと聞いている。自分の知識・技術をどう活用していいかわからないという意見もある。また登録することによって自分の時間が制限される場合もある。

事：シニア登録制度は生涯学習ボランティアという枠組みの中で登録してもらい、教育委員会

で進めているものだったため、小中学校の授業の支援という形で活用をしている。シルバー人材センターとの関わりは把握していない。

事：働く意欲のある高齢者がシルバー人材センターに登録している。シニア登録制度はお金目的ではなく、世の中の役に立ちたいという欲求に答えるものだと理解している。高齢者の利活用という言葉の裏には時間に余裕があるので、働いて生きがいを見つけてほしいという意味が含まれていると思う。しかし、全員が働きたい人ばかりではない。一概に高齢者へ働くことを強要するのはいかがなものかと感じている。

メ②：シルバー人材センターの費用が高いと感じる。地域とのつながりがあれば、シルバー人材センターに頼む必要がないかもしれない。働きたい人がいるのであれば、それを受け入れる組織をつくるべきだと思う。

コ：高齢者に対して、ある意味行政も地域も手を出さなくてもいいという考え方があっても良いと思う。何歳になっても病気にならずに元気でいられることが目指しているところだと思う。

メ③：元気な人は自分で生きがいを探しながら、ずっと生活をしているのでそれは非常に良いこと。元気な人じゃない人に対して考えていくべきではないか。将来元気でいられるかはわからないため、そういった人たちのフォローが必要になってくる。

コ：どんな支援があれば今までの生活を続けられるか。

メ①：自分の体を動かすことに対するフォローが必要。一人だけだとサボりかねない。体を動かす習慣づくりが必要。

オ②：役場ではいきいき教室をやっている。述べ2000名以上の参加がある。1回30名程度の参加で女性の参加者が多く、一部の利用者が多い。体を動かすことへのサポートについて、行政がすべて主体となってやるのではなく、考え方を変えて今後検討していくことが必要と感じた。

コ：男性は地域コミュニティに参加する人が少ないと感じるが、それは地域とのコミュニティとは別なところで活動しているため行かないのか。行きたい人もいるけど行けないのか。

メ②：女性は相対的に会話をすることが好きのため、人との集まりの場に参加するのではないかと。男性はグループの中に積極的に参加したいと思う人は少ないと感じる。

コ：地域コミュニティに自ら参加することと今回の会議のように無作為で選ばれることに違いを感じるか。

メ②：町からの情報を客観的に見て、町がどのように考えているかを考えている。行政は形式を作っているだけのように感じる。社会福祉協議会で何をやっているかわからない。行動の伴わない組織と感じている。いかに働きかけをするのか。サークル活動で参加者が少ないのは、接する機会がないため。どう声掛けしたらよいかわからない人もいるため、サポートが必要。

コ：高齢者が元気を維持するためにできることについて、先ほど行政が一律で進めることは限界が来ているのではないかという話があったが、幕別町ではどう思うか。

ナ：幕別町もシルバー人材センターの登録者が減っている。そのため単価が高くなっている。行政側から高齢者に対して何をするか、つながりを持たせるか考えたときに形だけのものとなってしまうと進まないと感じる。忠類村では町内会対抗の運動会があり、そこでコミュニティが生まれている。町民からの自発的なものが大事ではないか。

コ：地域で高齢者を支えるにはどうしたら良いのか。

オ①：社会福祉協議会という団体が何をやっているのか、周知不足な部分がある。自分たちの活動がうまく PR できていない。保健福祉課と連携してまだできるのではないかと感じている。

オ②：在宅支援係としても社会福祉協議会と関わる人が多いが、住民に対しての PR 不足というのはすごく感じる。

コ：地域コミュニティを支えるにあたって、地域のつながりが弱くなっていることについて地域がどうするか。社会福祉協議会ではやることはやっているが、それを伝えきれていないことについてどのように感じるか。

メ②：在宅の人が求めているものを行政が把握しきれていないと思う。個々のニーズを人口の少ない清水町だからこそ完全に把握することが可能ではないか。地域を思いやる活動をいかに作り上げていくか、そのために行政と社会福祉協議会が連携をしてどのように行動していくかが高齢社会を支えていくのではないか。

メ①：町内会では役員の若返りもあり活発に活動している。

事：除雪に対する苦情要望が多い。除雪のサービスがあるが、制約がかなりあるため使いにくい。これから高齢者が増えていくと、除雪ができない世帯が続出すると思っている。地域で高齢者を支える代表的な仕事として除雪をどうしたら良いのか議論してみたい。

オ②：除雪サービスは制限がかなりあるため、満足度の高いサービスにはなっていない。また、近所付き合いで除雪をしてもらっている世帯もいる。

メ③：農村部では近所の人勝手にトラクターで除雪してもらえる文化がある。

メ①：年々除雪をするスピードが遅くなってきたため、あと何年できるか不安に感じるころはある。

メ②：隣の家は除雪機を持っているが、やってもらったことはない。除雪を運動の一環と捉えることも必要。苦情が多いのは市街地に雪の置き場所がないことも原因ではないか。

コ：地域（共助）でできるところとできないところの差をどう考えるか。地域でカバーできないから行政がすべてやるべきなのか。できないところだけを行政がサポートするのか。

事：困りごとの把握が行政としてレベルが低いという話があった。困っている人の情報を積極的に集めるためことが重要であると感じた。そのために町民からの協力も必要になると思う。すべての世帯の除雪を行政が行うのは、不可能だと思っている。清水町にある社会資源を有効に活用できていない。行政も町にどんな社会資源があるのか積極的に情報を取りにいかない。住民も行政に対してあきらめている部分もあり、困りごとを伝えることをしていない。このミスマッチが解消され、清水町にある社会資源を有効に活用することができれば様々な社会問題を解決できるのではないかと感じた。

メ③：本当に困っている人の優先順位を考えて、取り組むことが望ましいのではないかと思う。

コ：本当に必要なところに行政サービスが行き届いていないかもしれない。逆に地域でやれることもあるという考え方があるのではないと思う。

事：行政は一度ルールを作ると、ルールを守ることが目的となってしまう。困りごとに対して行政が積極的にアプローチをして、情報をとるべき。困りごとは時代とともに変わってくるため制度を守るのではなく、制度を柔軟に変えていくことが重要となってくる。

メ②：役場職員に対して、机の前に座って何をやっているのかわからないと感じることが多い。

職員が地域への聞き取りをすることで、困りごとを把握できるのではないか。地域とのつながりが町を作っていく。清水町は新しく来た人に対しての距離感を感じる。隣近所の声が届きやすい結びつきができれば、お互いに助け合う素晴らしい町になると思う。陳情に対してどう素早く対応していくか。

コ：新しく入ってきた人が距離感を感じてしまっていると、清水町に住んでよかったと思えない要因になると思うので、絶対に解決したほうがいいと思う。

メ②：自分が動けなくなったときに、清水町には住めないと思っている。都会に戻ることを考えている。

ナ：幕別町では新しく入ってくる人がほとんど札幌市街。札幌市街に転入してくる人は帯広市民だと思っている人もいる。サービスを一度提供すると、それ以下のサービスにはできない。その水準を保っていくのが難しい。

コ：元々町内会などの地域で行っていたことを一度行政がやってしまうと、行政が丸抱えになってしまい、地域の力が弱くなってきていると感じる。どこまでを行政がサポートするのかをそれぞれの自治体で考えていくことが重要になってくると感じた。

高齢者がさらに暮らしやすくなるために、行政がしなければならないことはあるか。地域や民間でできることはあるか。

メ①：引っ込み事案にならないことが大切。

メ②：いずれ高齢者になるという自覚を持って、ルールに縛られず、ルールが時代に合っているのかを考えて行動してほしい。その積み重ねが全国モデルの町になる。

メ③：福祉の担当部署と社会福祉協議会の役割が町民に伝わっていない。高齢者の困りごとは個々に違うため、民生委員や町内会の役員や保健担当職員が連携をして実態を把握できる取組が必要と感じた。

コ：行政職員や農業者などの区別をせずに全員が地域住民と捉えられている町はうまくいっている印象がある。清水町も距離の近い議論ができていますので、かなりそこに近いと思う。

ナ：高齢者がさらに暮らしやすくなるために行政がしなければならないことはすごく難しい問題だと思う。幕別町では予算を使わず、頭を使えと言われる。行政のやることは予算を使うことに捉われがちだが、仕組みづくりをして地域の住民が参加できるようなものをできないか。

時代とともに社会も変わっていくので、その仕組みも変わっていくものだと思う。

オ①：情報の発信の仕方が一方通行になっている。伝わっているだろうではなく伝わっていないかもしれないという「かもしれない」という部分を強く意識して今後取り組んでいきたいと思う。

オ②：役場に来る人への対応はしているが、来ていない人への対応がどこまでできているのか。ルールに縛られずにどのように改善して、良い制度を作っていくか考えなければならないと感じた。

コ：受け身だけでなく、どう自分たちが積極的に周りを知っていくか努力が必要。島根県雲南市では地域の中でおせっかいをする人を増やすために「おせっかい会議」という取組をしている事例がある。清水町の参考になるのではないかと感じた。

事：行政が解決しようとする、制度や仕組みで何かをやろうとしてしまうが、地域の支えなど制度や仕組みではカバーできない人情的な部分に対して支援をしていかなければならないと感じた。おせっかいを行政だけでなく民間もする。他人に興味を持ちながら豊かな社会を作らなければならないと感じた。

事：地域とのコミュニティは行政が作るものではなく、人が作るものだと思う。地域のコミュニティに役場の職員が先頭に立って参加するべきであり、求められていることではないかと感じた。地域の中のニーズに合わせて、除雪や見守りなどを仕事のように仕事じゃない形でやっていければと思う。行政がそういう仕組みづくりができれば地域のコミュニティが円滑に進んでいくのではないかと感じる。

コ：役場の職員全員が地域住民のリード役という意識を持って、仕組みづくりをすることだけが役場職員ではないと共有できれば全国モデルになるのではないかと感じる。これを総合計画の中に書けるとすごく面白いと感じた。